

# 日本語における漢語の来し方と行く末

中山 緑朗

## ①語種の分類 ②現代語の語種比率 ③語種の歴史的比率 ④現代語と漢語

①日本語の語彙を分類する方法として、語種（語源・出自）による分類が重要な方法の一つである。これはまず「固有語」と「借用語＝非固有語」に大きく分類され、さらに下位分類として、

固有語＝和語

借用語＝漢語・外来語

その他の語種＝混種語

に分類されるのが一般的である。漢語は歴史的に見て、各時代に渡って日本語に与えた影響力の大きさ、日本語への浸透度も特別なものがある<sup>(注1)</sup>。外来語は西欧語系の語が中心であって、しかもそのほとんどが16世紀以降に移入され、漢語に比べれば歴史的に見て日本語としての浸透度は浅い。漢字文化圏という歴史的な背景を持つ日本語の中の漢語は、同じ借用語ではあっても、外来語とは区別して論じられることがふつうである。

混種語は、和語・漢語・外来語が結合して作られる合成語であり、「大型車・天然ガス」のようにほぼ対等に結合している「複合語」と、「四角い・牛耳る・サボる」のような動詞や形容詞を生み出す「派生語」などいろいろの組合せが見られる。

②量的な分布という観点から語種の比率を計算した調査が、これまでにいくつか発表されている。昭和31年に刊行された雑誌90種の用字・用語を調査した統計がある（国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字』1964年）。この報告によれば、

	異なり語数 (%)		延べ語数 (%)	
和語	11,134	(36.7)	221,875	(53.9)
漢語	14,407	(47.5)	170,033	(41.3)
外来語	2,964	(9.8)	12,034	(2.9)
混種語	1,826	(6.0)	8,030	(1.9)
計	30,331	(100.0)	411,972	(100.0)

となっている。異なり語数で考えると、使用されている語のうち半数近くが漢語ということになる。書き言葉の統計に対して、話し言葉の統計もあり（野元菊雄ほか「日本人の知

識階層における話し言葉の実態」＜文部省科研費特定課題報告書＞1980年）、これによれば、

	異なり語数 (%)		延べ語数 (%)	
和語	2,166	(46.9)	45,979	(71.8)
漢語	1,850	(40.0)	15,087	(23.6)
外来語	465	(10.1)	2,078	(3.2)
混種語	136	(3.0)	879	(1.4)
計	4,617	(100.0)	64,023	(100.0)

となっている。異なり語数で漢語が多く使用されるのは、話し言葉においても抽象的な概念や重要な事項つまりキーワードは漢語が使用されているからと推察する。

2006年の月刊雑誌70種（国立国語研究所『現代雑誌200万字言語調査 語彙表（CD-ROM版）ver. 1.0』）の調査と、『新選国語辞典 第八版』（小学館2002年）の統計を比較して示すと（ともに異なり語数）、

	『現代雑誌200万字言語調査』 (%)		『新選国語辞典』 (%)	
和語	10,970	(27.7)	24,708	(33.8)
漢語	14,092	(35.5)	35,928	(49.1)
外来語	12,190	(30.7)	6,415	(8.8)
混種語	2,407	(6.1)	6,130	(8.3)
計	39,659	(100.0)	73,181	(100.0)

のようになっている。

これらの調査報告等から言えることは、現代語では漢語の比率が徐々にではあるが、減少傾向にあり、一方で英語を中心とした外来語が増加し、月刊誌のように週刊誌に比べると比較的政治や経済、社会問題を多く扱う傾向の強い分野では、異なり語数では和語を押しつけて、外来語が漢語と拮抗する勢いを見せているということである。国語辞典では外来語や新語等を採録することが少ないことを示しているが、漢語の根強さも際だっている。

### ③語種の歴史的比率

奈良時代の『万葉集』（8世紀後半）ではほぼ和語だけが使用され、『源氏物語』（11世紀始め頃）でも全体のほぼ1割未満（それも仏教語や固有名詞が主である）にとどまっている（もちろんこの時代に漢語が使用されなかったということではなく、和歌や和文の世界では漢語の使用が抑制されていたという事情がある）。中世では、仏教思想が庶民にまで拡大し、こうした背景があって、漢語を多く使用した和漢混淆文によって、日本文学を代表する『方丈記』『徒然草』などが著された。中古末の歴史物語『大鏡』や中世の作品には異なり語数では20～30%に及ぶ漢語が使用されている（宮島達夫『古典対照語い表』

笠間書院)。また中世末期の『日葡辞書』(1604年頃)では、約2割が漢語で占められるようになっている。

明治時代は欧米先進国の文物を移入するにあたり、漢字・漢語の力に頼ることが多く、そのために漢語が急増した時代であった<sup>(注2)</sup>。『源氏物語』から幕末のヘボン著『和英語林集成』(1867)に至る長い時間で漢語増加率は14.8%であったが、『和英語林集成』から井上十吉著『新訳和英辞典』(1909)に至る漢語の増加率は13.5%ではほぼ匹敵している(沖森卓也ほか『図解日本語』三省堂 2006年 P78)。

明治初期の仮名垣魯文『安愚楽鍋』(明治4～5<1871～72>年)は当時の言語生活をよく反映している作品として知られているが、漢語の使用率を見てみると、

鄙武士 38.2%    士 26.0%    町人 18.0%    商人 16.7%    職人 14.1%

となっていて、武士が他の階層の人々よりも漢語を多く使用していたことが理解できる。武士階級が子弟の教育で使ったテキストは、「四書五経」などの経書や「史記」などの歴史書であり、明治初期の新時代に対応するために作られた新語は、彼らが使い慣れた漢字・漢語であった。こうした傾向が平均化するのには国定教科書が普及する明治37年(1904)であった(飛田良文ほか『明治大正新語俗語辞典』東京堂 昭和59年 P341～342)という。

#### ④現代語と漢語

明治時代以降の新語や造語された語を分類すると、

庶民の造語法＝人名一八百長・山勘

擬声語・擬態語—ドン・ジンタク

囃し言葉—オッペケペ・オヤマカチャリン

外国語の誤解—カメ・ステンショ

知識人の造語法

和製漢語＝新造語—恋愛・背景・要素・理想

合成語—優待券・隆鼻術・労働者・積極的・必然性・第一印象・

優勝劣敗

省略語—流感

当て字の音読語—流行歌・流行感冒

外来語＝借用語—ステーション・アルバイト

省略語—デモ・スト・プロ

動詞化—デモる・サボる・ハモる

和製洋語＝合成語—オールドミス・オールバック・ホームページ

省略語—モガ・モボ

漢語＝転用語―演説・郵便・風潮・影響

のような整理の仕方が考えられる（飛田良文ほかの前掲書 P347～348）。

近年の新語や俗語を語形や意味によって分類すると、

- (1) 加工する場合＝アカハラ・今一・朝一・一般ピープル・ばかでかい、等。
- (2) 変化させない場合＝げろげろ・ぼっきり・ピーピー、等
- (3) 意味による場合＝粗大ゴミ・さくら・爆睡・チャリンコ・役不足、等。

のように分けられる（米川明彦「俗語概説」＜『日本俗語大辞典』東京堂出版 2003年 P694～697＞）。

俗語や新語の場合、日本語の専門家や知識人とは異なり、一般の日本人が「語種」を意識しながら新語に親しんでいることは少なく、たとえ硬いと思われるような漢語であっても「超～・滅茶メツチャ～・サイコー・サイテー」などのように、「時代に合っている・語感のよさ」などによって、若者を中心に普及している語が多いようである。

現代日本語における語彙の最大の問題点は、パソコン用語を中心としたIT関係のカタカナ語の氾濫である。これらは英語を場合によってはそのまま使用することもあり、多くはカタカナ語として使用されている（「クリック・ダウンロード・リンク・スクロール・インストール・アクセス・メール」などの語は「～する」を伴ってサ変動詞として日常語化している）。これらの語のほとんどは国語辞典には未採録であるが、前述の『新撰国語辞典』のように、カタカナ語だけに限定すれば、国語辞典の多くは日本語の現状を反映しているとはいえない。

このような事情で見ると漢語は全体に衰退しているといっているかもしれない。しかし、「義理チョコ」などといった混種語には採られており、また「携帯」は「ケータイ」となって若者言葉に浸透していることなどを考え合わせると、日本語として長い伝統を培ってきた漢語を、西欧語系の外来語やカタカナ語がそう簡単に駆逐できると思えない。結局、30年以上前の提言ではあるが、次のようなことが指摘できる。

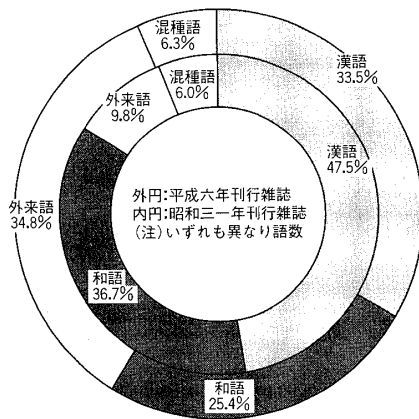
将来の日本語がどのようなかといえ、恐らく次のことが言えるだろう。語彙の基本的な部分、つまり種々の文章に広くわたって使われ使用率も大きい語は、和語と使い慣れた漢語であり、これらが語彙を形成する見出し語（異なり語数）の40パーセントから50パーセントを占めるだろう。なぜなら～、使用率が大きく使用範囲も広い和語（および使い慣れた漢語）は、かなり長い間残存して使われるし、比較的の使用率が大きい語も長く生き延びるからである。残りの比較的使用率が小さい50～60パーセントは、現在ではその3分の2以上を漢語が占めている。この部分では（注 外来語をこだわりなく取り入れる）日本人の態度が続く限りは、次第に外来語が勢力を伸ばすだろう。（樺島忠男『日本語はどう変わるか―語彙と文字―』岩波新書 1981年 P176～178）

注.

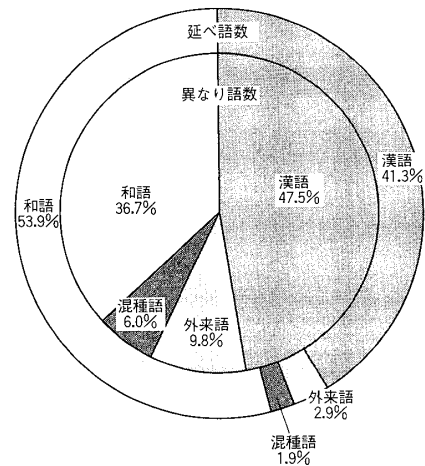
- (1)スウェーデンの中国語学者カール・グレンによれば、「国クニ・絹キヌ・馬ウマ・梅ウメ・麦ムギ・竹タケ」など二十数例の語は、中国語から原始日本語に移入された語であるとしている（亀井孝ほか『日本語の歴史 1 民族のこぼの誕生』平凡社 1964年 P365～374）。この説については亀井孝らの否定的な見解もある。
- (2)ヘボン『和英語林集成』の初版を慶応3年（1867）、再版を明治5年（1872）、三版を明治19年（1886）に刊行している。第三版の序文でヘボンは「新語の蒐集・整理に努めた結果として、和英の部に10,000語以上の増加が行われた。これらの語の大多数は漢語である」とし、しかも専門分野の語を採録するとまた10,000語を増加させる必要があるのでは、「今回は一般語だけに限ることにした」と述べ、新漢語の急激な増加を指摘している（松村明「解説」＜『和英語林集成一復刻版一』講談社 1974年＞）。

【付録】

(1)



「平成6年刊行雑誌語彙調査」は、『外来語言い換え手引き』（ぎょうせい 2006年）による。



『現代雑誌九十種の用語用字(3)』(1964) 61

(2)

## システム統合（２）

### \*ASPサービスとは

業務用のアプリケーションをインターネットを利用して、顧客にレンタルする事業者あるいはサービスを指す。利用者はインターネットに接続された環境で、ブラウザソフトを使ってASP事業者のサーバにアクセスし、ASP事業者から提供される各種アプリケーションソフトを利用する。

### \*メリット・デメリット

- システムメンテナンス（ソフト・ハード）が容易になる（学内に何も無いから）
- 独立運用よりも中期的にはコスト安
- 災害や停電などのアクシデントへの対応が容易
- ×セキュリティリスクが高くなる（個人情報等の外部流出→人的漏洩リスク）
- ×利用者側の環境に依存する事項が大きい

明治大学図書館  
Meiji University Library

## 何ができるか（１）

### ■書誌情報の共有

- ・書誌作成作業の軽減
- ・シームレスな横断検索

### ■所蔵情報の共有

- ・大学間のオンライン取り寄せ機能の実装
- ・資料の分担収集の推進

### ■発注情報の共有

- ・資料調達予算の有効利用
- ・蔵書の個性化の推進

明治大学図書館  
Meiji University Library

## 第68回私立大学図書館協会総会・研究大会資料

### 明治大学図書館 中林雅士「大学間の図書館システム統合—システムモデルと実装—」より

◇「付録(1)(2)」は、結論として示した樺島氏の説を補強するために置いたものである。「付録(1)」の右側の円グラフは1960年代初めに行われた当時刊行されていた雑誌による大規模な調査であり、日本語における語種の比率を示す資料としてよく用いられる。異なり語数で平成6年刊行の雑誌の語種の比率を示した円グラフが左側の図表である。これで見れば、外来語が9.8パーセントから34.8パーセントと大きく増加していることがわかる。現代日本語に見る外来語が大幅に使用率を増加しているとの実感を、数値で明確に示したデータといえよう。

「資料(2)」は2007年9月6・7日の両日に開催された「第68回私立大学図書館協会・研究大会」において発表された中林雅士氏（明治大学図書館）の「大学間の図書館システム統合—システムモデルと実装—」から、ここでは現代日本語で使用される語種の例として引用させていただいた。左側の「システム統合（２）」では、表現されている中で、キーワードと思われる単語はほとんどがカタカナ語・外来語である。それに対して、右側の「何ができるか（１）」では見出しの表記やキーワードと思われる語に漢語が利用されている。漢語の使用率が漸減していることは事実であろうが、この例で見るように、漢語の根強い伝統はまだまだ継承されていくと考えられる。

（この論文は、2007年9月15・16日に中国・山東省済南市に本部がある山東大学で開催された『国際シンポジウム・東アジアの視野における日本学研究』の分科会「言語」での発表を基にしている）